

6331-103

平成13年10月26日

各関係機関長

各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成13年度病害虫発生予報第7号について

平成13年度病害虫発生予報第7号を発表したので送付します。

平成13年度病害虫発生予報第7号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	本文での 記載ページ
		平年比	
野菜・花き類全般	疫病・軟腐病等 アブラムシ類 ハスモンヨトウ・タバコガ・ オオタバコガ	— 並 やや多	P 2 P 2 P 2
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 ミナミキイロアザミウマ	並 やや少 並 並	P 3 P 3 P 3 P 3
冬春ピーマン	斑点病 ミナミキイロアザミウマ	並 並	P 3 P 3
冬春トマト	葉かび病 ハモグリバエ類	並 並	P 4 P 4
冬春イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 やや多 やや少	P 4 P 4 P 4
かんきつ	ミカンハダニ	並	P 5
果樹全般	カメムシ類	—	P 5
茶	カンザワハダニ	並	P 5

○ 11月の気象予報

気温、降水量、日照時間のいずれも平年並の可能性が大きいと予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台10/26発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

野菜・花き類全般

1 疫病・軟腐病等

[予報の根拠]

1) 9月16日の大雨以降も曇雨天が多く、病気の発生しやすい気象条件となっている。

[防除上の注意]

1) 高温多湿で発生が増えるので、ほ場の排水、ハウス内の換気につとめる。

2) 予防散布に重点を置き、被害株は早めに抜き取り処分する。

## 2 アブラムシ類

[予報の根拠]

1) 黄色水盤トラップによる誘殺数は、平年並である。

[防除上の注意]

1) 定期的な防除を実施する。

2) 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

## 3 ハスモンヨトウ・タバコガ・オオタバコガ

[予報の根拠]

1) 各地に設置したフェロモントラップでの誘殺数は、ハスモンヨトウ（佐土原町）、タバコガ及びオオタバコガ（茶臼原）とも、平年より多くなっている。

2) 11月の気温、降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。

## 冬春キュウリ

### 1 ベと病

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率15.4%（平年25.4%）、発病葉率0.5%（平年3.5%）は平年並である。

[防除上の注意]

1) 多発すると防除が困難なため、予防散布あるいは発生初期の防除に重点をおく。

2) 草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

### 2 うどんこ病

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率7.7%（平年45.7%）は平年より少なく、発病葉率1.5%（平年5.9%）は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

1) 葉裏から発生するので、葉裏を観察して、初発時にすみやかに薬剤散布を行う。

2) 老化すると多発する傾向にあるので、なるべく老葉は除去し透光通風をよくする。

### 3 褐斑病

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率7.7%（平年25.9%）は平年よりやや少なく、発病葉率1.1%（平年2.9%）は平年並である。

[防除上の注意]

1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。

2) 換気をはかり、高温多湿にならないように努める。

3) 窒素質肥料の多用は避ける。

### 4 ミナミキイロアザミウマ

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率15.3%（平年8.9%）は平年並であるが、1葉当り寄生虫数は0.1頭以下の微発生である。

[防除上の注意]

1) 多発してからの防除は著しく困難なので低密度のうちに防除を徹底する。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病

[予報の根拠]

1) 10月中旬の巡回調査では発生は未確認である。

[防除上の注意]

1) 気温20～25℃で、多湿のとき発生しやすいので、除湿に努める。

2) 病原菌が侵入した後の防除は困難であるので、予防散布を行う。

### 2 ミナミキイロアザミウマ

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率18.2%（平年34.9%）、10花当り寄生虫数0.7頭（平年0.7

頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が見られ始め、多発してからの防除は困難なので、低密度のうちに防除を徹底する。

### 冬春トマト

#### 1 葉かび病

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の巡回調査では発生は未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 気温20～25℃で、多湿のとき発生しやすいので、除湿に努める。
- 2) 密植を避け、肥料切れしないように注意する。

#### 2 ハモグリバエ類

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率55.5% (平年47.1%)、被害葉率5.6% (平年9.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生を確認したらすみやかに防除を実施するとともに、被害葉を処分する。

### 冬春イチゴ

#### 1 うどんこ病

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率8.3% (平年17.3%)、発病葉率0.7% (平年2.8%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) はじめ葉裏に発生しやすいので初期発生の発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除がきわめて困難になるので、予防散布に重点を置き、発病後は散布間隔を短くするなど、発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

#### 2 炭疽病

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率25.0% (平年7.5%)、発病株率1.5% (平年0.5%)は平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 密植を避け、適度の栽培密度とする。
- 2) 換気をはかり、かん水量はなるべく制限する。
- 3) 被害茎葉はほ場から持ち出し処分する。

#### 3 ハダニ類

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率8.3% (平年30.2%)、寄生株率0.2% (平年6.2%)は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、下位葉を主に本ほ初期の防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなるが、茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏にかかるように散布する。
- 3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

### かんきつ

#### 1 ミカンハダニ

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率44.4% (平年43.9%)、寄生葉率14.1% (平年14.6%)は平年並である。

- 2) 11月の気温、降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1)

冬期のマシン油乳剤の防除効果は優れているので必ず実施する。

- 2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

## 果樹全般

### 1 カメムシ類

[予報の根拠]

- 1) 9月下旬以降、都農町に設置したフェロモントラップでのツヤアオカメムシ誘殺数が増加している。  
[防除上の注意]
- 1) 加害時期や発生量は場所による変動が大きいので、早期発見、早期防除に努める。

## 茶

### 1 カンザワハダニ

[予報の根拠]

- 1) 10月中旬の発生面積率31.6%（平年36.2%）、寄生葉率1.7%（平年4.7%）は平年並である。
- 2) 11月の気温、降水量は平年並と予想されている。

○その他

- 1 防除等の詳細については「平成13年度病害虫、雑草防除等指導指針」を参照する。
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬安全使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分

多い（高い） やや多いの外側10%の度数の入る幅

やや多い（やや高い） 平年並の外側20%の度数の入る幅

平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅

やや少ない（やや低い） 平年並の外側20%の度数の入る幅

少ない（低い） やや少ないの外側10%の度数の入る幅

（平年値は過去10年間の平均）

○お知らせ(<http://jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

（最近の追加登録内容）

- ・ハスモンヨトウ薬剤感受性試験結果（採集場所：国富町）
- ・病害虫写真館にクチブトカメムシを登録

[Back](#)